
俺の異世界物語:一部の番外編置場

七つ夜&夜つ七

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の異世界物語…一部の番外編置場

【Nコード】

N3125S

【作者名】

七つ夜&mp;夜つ七

【あらすじ】

番外編の一部はコッチに載せる事にしました
理由は更新を長い間していない事と、高校を卒業し、仕事をするようになった事で今までより更新速度が落ちる事になるからです

※ちなみに番外編といっても面白そうなら本編にも設定を持っています。くつもりです。

例…刹那が飲まれた薬の効果等……

あと、番外編は何でも「あり」です……よろしくお願いします

番外編・・前編（前書き）

いきなり変えてすみませんでした！！
とりあえず初のコラボもこちらに載せさせていただきます！

番外編…前編…

番外編

初クロス！ラストのラストによるラスト（と女性陣＋2人）のための計画

作者「どうも皆さん、司会者兼ビデオ担当の作者です！」

同じく司会者兼雑用担当の七つ夜です

リキュル「そしてデザイナー兼アルバム作り担当のリキュルよ！」

ラスト「今回の主役をやらせて頂くラストです。よろしく願います」

今回はゲストを喚んでいます

作者「そう！初クロスの相手は…退魔師見習い様執筆『欠陥チート勇者』の主人公！」

ですが退魔師見習いさんから許可は得ています。と言うかこの企画を考えたのが退魔師見習いさんです

作者「師匠から許可もらってるから問題ナッシング！お前ら、駆を着せ替えちまえ！！」

レイナ「分かりました」

リクス「了解です」

リキュル「うふふ…た〜ぷり可愛がつてあげるわ（はあと）」

駆「止め、うわっ！？何すぐっ！？……………」

ラスト「とりあえず気絶させました。気絶している間に着せ替えましょう」

相変わらず容赦がありませんね

シルディア城

作者「どうやら着せ替えが終わったみたいだな」

ラスト「レイナさん連れて来てください」

レイナ「分かりました（私が被害者じゃないのに寒気がします…）」

7

駆「なんでこんな格好しなきゃいけないんだよ! ? と言うかガータ
ーベルトは流石にねえだろ! 俺は男だぞ! ? 」

作者「・・・違和感ねえ」

ちなみにメイド服です

今回はヴィクトリアンタイプ（まあロングドレスですね）の黒…
それにホワイトブリム（頭に付ける帽子 or カチューシャの事。今
回はカチューシャ）とエプロンドレスを追加した物です
リクエストは『欠陥チート勇者』のアリスからです

ラスト「さて、馮さんの着替えも終わったので、そろそろ本番に移行しましょう」

*
*
*
*
*
*
*

「おい、なんでこんな物を付けなきゃいけないんだよ!？」

ラスト「何故って…散歩をするからです」

「普通に歩くだけで良いじゃねえか！なんだよ首輪とリードって！？」

ラスト「ペットの標準装備ですよ?……ああ、言い忘れてましたが逆らったら…死ぬ事すら出来ない地獄の拷問フルコース2日間（王様は1時間）に処しますので」

「なっ!？」

？」

駆「・・・教えてくれよ」ラスト「どうぞ・・・パーティーにご招待します」

扉を開くと・・・

『駆っち初クロスありがとう！』

と書かれという板が吊るされていた

駆「こ、これは？」

ラスト「歓迎パーティーですよ？」

作者「おゝい駆っちゝ！固まってるんで早くコッチに・・・」

駆「・・・ああ、今行・・・」作者「料理持ってきてくれよ」

駆「・・・は？」

ラスト「ぷっ・・・！」

ナイスです・・・今の表情はナイスです

ラスト（リキュール、写真は撮りましたよね？）

リキュール（バッチリよ、ラストちゃん！）

駆「なあ、1つ聞いていいか?・・・俺はこのパーティーに参加出来るのか?」ラスト「出来ますよ?・・・メイドとしてなら・・・クスクス」

駆「やっぱりそう言うオチかよ!?!」

当たり前でしょう？まさかメイドが主人と一緒に食事を取れると思
ってたんですか？

ラスト「とりあえず：皆さん（と言っても七つ夜達しか居ませんが）に飲み物を配ってください」

*
*
*
*
*
*
*

「コレでよろしいでしょうか…お、お嬢様…」

リキュル「ぶはっ!!」

リクス「これで棒読みじゃなかったら完璧なんですが……」

七つ夜「流石に無理ですよ」

レイナ「あ、七つ夜が普通に話してる」

七つ夜 「まあたまには……」

ラスト「ダメですよ、**駆さん**。恥じらいを捨てなければ**立派なメイ**」

ドにはなれませんか？」

作者「と言う訳で！写真撮影スタート！！」

駆「何が『と言う訳で！』なんだ！？」

魔理亜「なんでも良いから早く可愛いポーズをとってくれないか？
じゃないと…お姉さんが少年を食べちゃうぞ？ふふふ…」

駆&作者「って誰だよアンタ！？」

ラスト「貴女は…まだ登場する時ではありません。…さっさと帰って
ください」魔理亜「…ふう、君に言われたならしょうがないな。
今回はおとなしく帰るとしよう」

作者「い、今の誰？」

ラスト「気にしないでください。…さて駆さん、まずは『お帰り
なさいませ、ご主人様』と言いながらスカートの端を持ち上げ、軽
くお辞儀し、上目遣いでカメラに微笑んでください♪」

駆「細かつ！？」

作者「リキュウウル！！！鼻血出して気失ってんじゃねええええ
ええ！！！！今すぐカメラの準備だ！俺はブルーレイに録画する！！」
リキュル「・・・はっ！？いつの間にか撮影会になってる！！カメ
ラをセットしなきゃ！！」

ラスト「はい…3…2…1……スタート！！」

駆「お、お帰りなさいませ、ご主人様…」

パシャパシャパシャパシャパシャパシャパシャパシャパシャパシャ
パシャパシャパシャパシャパシャパシャパシャ……！！！！

リキュル「ダメ…幸せ過ぎて死にそう♪」

レイナ「は、鼻血が……」

リクス「レイナ、早くティツシュを……私も危なかったですね（ボソツ）」

ラスト「まあ……合格にしてあげます」

七つ夜「では次は食器を運びながら転んで、泣きながら『ごめんなさい』ご主人様：悪気は無かったです』と言ってください。」

作者「いやここは、服を少し着崩し、頬を赤く染めながら『ご主人様：優しくしてくださいね♪』と言って欲しい」

ラスト「・・・それは良いですね。では駆さん、2つともやっつけてください」

駆「まだあるのかよ!？」ラスト「当たり前です。まだまだ撮りま
すからね」

*
*
*
*
*
*
*

約20分後・
・
・

「何か……大切な物を無くした気がする」

ラスト「何を言ってるんですか馮さん？」

七つ夜 「まだ3枚しか撮ってないんですが…」

作者「と言うか最後はノリノリだったじゃねえか？」 駆「いやなん

か勝手に体が動いてた…」

レイナ（アレってプライドの杖だよね？）

リクス（ええ…ですがかなり小さくなってます）

リキュル（あの大きさなら手に収まるわね）

ラスト「さて、そろそろ飽きましたし…止めますか」 駆「ホントだよな？」

ラスト「ええもちろんですよ。私が嘘をついた事がありますか？」

作者「嘘はつかないけど大事な事を話さないよな」

七つ夜「まあ…確かに嘘はつきませんね」

駆「不安だ…」

ラスト「それでは作者、お願いします」

作者「分かった。スキル発動！『強制転送』！」

番外編…中編…

作者「着いたぜ！」

七つ夜「どうですか、私の創った神社は？」

ラスト「可もなく不可もなく…ですね」

駆「どうせ…こんなオチだと思ってたんだ」

現在、私達は七つ夜が創り出した神社にいます
ですが…狛犬がネコ○ルクとネコア○クカオスのでしょうか？

七つ夜「実は…この猫好きでして。特にカオスが」作者「ああ、
彼は素晴らしい猫だよ。なんだっけ？邪神セイバー系の猫…とか」
ラスト「それは白い方です。黒い方は伸びきってうどんっぽくなっ
たラーメン系の猫ですよ」

駆「何を話してんのかまったく分からねえ…」

知らないなんて…人生の10分の1は損してますよ？

作者「いやそんなに酷くねえよ」

七つ夜「そんな事は後でゆっくり話しましょう。今は…」

ラスト「そうですね。そろそろ次の動画を撮りましょう」

駆「次か…何やらされるんだろ俺？」

*
*
*
*
*
*
*

約5分後：

ラスト「さて…ではカーテンを開けてください」

七つ夜「分かりました」

カーテンの先には
：

蒼白の巫女服に身を包み、手には竹箒、そして首には『アリス専用』と書かれた首輪が：

駆「今度は巫女かよ……しかも首輪付き……本編（正確には番外編）でも着せられるし、クロスオーバーでさえ着せられるのか……」

七つ夜「なんか…もの凄く遠い目してますね」

作者「氣にすんな♪どうせ最後は（色々プレゼント渡したら）帰るんだしな」

ラスト「さて今回は…特に写真“は”撮らなくて良いですよ」

作者& a m p; 七つ夜「・・・え？今なんて？」

ラスト「だから今回は写真は撮らないんですよ」

作者& a m p; 七つ夜「・・・ゾッ（絶対とんでもない事するつもりだ）」

リキュル「じゃあ…何をやってもらうのかしら？……ってディアナちゃん何やってるの？」

ワンコ「ううゝ重いゝ！なあラスト、この壺持ってきたけど、いたい何に使うんだ……って誰がワンコだ！？」

作者「痛え！？ちよっ、脛はやメレ！！」

さて…今回の拷問アイテムが届いた事ですし…始めますか

ラスト「では駆さん、身を清めに行きましょう」

*
*
*
*
*
*
*

現在……滝

駆「寒い寒い寒い寒い寒い寒い寒い……いやむしろ痛い！」

ラスト「古来から身を清める時は滝に打たれるのが日本のルールです」

作者「（なあ：そんなルールあるのか？）」

七つ夜「（ありますよ？そしてある程度打たれると気付きます…あんまり意味が無いと）」

作者「ってダメじゃん!？」

ラスト「さて七つ夜、次はアレを準備してください」

七つ夜「イ、イエツサー」

*
*
*
*
*
*
*

現在……庭？

「馭待て！これになんの意味がある！？」

ラスト「キレイになるのは気持ちがいいじゃないですか？」

作者「いや……この広さは酷いだろ!？」

七つ夜「軽く東京ドーム入りますよこの広さ!？」

「そろそろ手がヤバいんだけど…」

ラスト「そうですか？なら手伝ってあげます。」
【傲慢の杖】

「手伝う気0だろ!？」
ラスト「え?何を言ってるんですか?手

「伝うのは作者と七つ夜ですよ？」

作者&mp.;七つ夜「・・・はい？」

ラスト「じゃあ3人仲良く…掃除を『しなさい』」

作者&a m p;，七つ夜「ギャアアアアアアアアアア！！！」

*
*
*
*
*
*
*

作者「う、腕が…」

七つ夜「け、腱鞘炎になりそう…」

ラスト「まったく、あの程度でへこたれないでください」

「あの程度って……」

3人が（だいたい3分の1で）気絶した後は全部私が掃除したんですよ？

まったく、これだから掃除が習慣じゃない人は…

作者「いや普段から掃除しとるて…」

七つ夜「ですがアレは死にますよ…普通」

ラスト「……では巫女編最後の拷も…修行に逝きましょう」

駆「今拷問って…しかも字が違う」

* * * * *

現在…本堂「墮落の間」

ラスト「さて駆さん、真ん中に立ってください」
駆「此処か？」

ラスト「そこです。ではそこに置いてある壺を開けてみてください
（私と作者、七つ夜以外全員退避してください！！！！・・・じゃないと後悔しますよ?）」

レイナ&w;ワンコ&w;リクス&w;リキュル「（分かりました）（分かった）（分かったわ）」

作者「ラスト、あの中に・・・何が入ってるんだ?」

ラスト「・・・最終兵器『ご馳走様でした』です」

七つ夜「なっ!?!ア、アレですか?」

作者「へ?七つ夜知って「うわああ!?!」どうし・・・た!?!?ってなんだこりやああああー!?!?!」

そこには・・・

何かヌメヌメとした巨大な生物（?）が!

作者「コレは・・・蛸^{タコ}!?!」

七つ夜「ラスト!流石に洒落になりません!今すぐ止めるべきです!」

ラスト「嫌です。止めたいなら止めれば良いじゃないですか?」

駆「うわあ!?!そんな所触るな!ちよっ、ひゃん!?!」

作者「ぐぶっ!?!」

七つ夜「作者ー!?!」

やはり作者には耐えられませんでしたか・・・まあ確かに色っぽいです

ね、今の駆さんは：

駆「ふあ…ん、あつ…はあ…はあ…あん!？」

さて、これから24時間はたのませてもら——

《18歳までは見ちゃダメですよ?》

駆「・・・（ビクン、ビクン）」

作者「なあいったい何をしたらこうなるんだ?」

七つ夜「・・・ブルーレイは渡さない方が良いかもしれません」

ラスト「大丈夫ですよ。今回の出来事は“全て”夢ですから」

作者&七つ夜「・・・はい?」

ラスト「あれ?気付いてなかったんですか?」

まあ確かに写真やブルーレイにも写ってますが……流石に私でも無理矢理は好きじゃないんです

作者「いやでもほら、駆っちにダメージあるし…」

ラスト「ダメージは精神的なモノだけです」

七つ夜「それ以前にあのタコは確かに私とラストで育てたモノでしたよ？」

ラスト「ああ、アレも夢を見せていただけです」

作者& a m p; 七つ夜「・・・詐欺師だ」

さて、今のうちに『コレ』を飲ませておきますか…

番外編…後編…

駆「・・・おい、なんでこんな事になってるんだ？」作者「何故ってそりゃ・・・」七つ夜「A r i s i aさんからいただいた秘薬・・・」ラスト「『性転換の薬』を投与したからですが・・・何か問題ありましたか？」

駆「あるに決まってんだろぅが!!」

まったくこんなに可愛い姿になれたのに何が不満なんですか？
胸だって大きいし・・・リキュルなんて20歳で『アレ』ですよ？

リキュル「・・・ラストちゃん、今かなりキツイ事を考えなかった？」

ラスト「気のせいですよ♪」

作者「絶対考えてたよな？」

七つ夜「絶対考えてましたね」

ラスト「何か言いましたか？」

作者& a m p ; 七つ夜「なんでもありません！」

まったく・・・少しは上下関係を知りましょうよ？
あんまり酷いと駆さんみたいになりますよ？

リキュル「ラストちゃんの裸見ちゃった♪…誰かティッシュ頂戴。
鼻血が止まらないの…」

ワンコ「怖っ！」

ラスト「……私だって傷付くんですよ？…ぐすっ」

傷付き過ぎて…つい、『七つの大罪』フル起動しちやいそうです

作者「それ洒落にならんから！！確実に死人でるから！！」

七つ夜「それに本編で出していないモノは使わないでください！」

ラスト「流石に冗談ですよ…それよりどうですか？似合ってますか？」

作者& a m p ; 七つ夜「似合い過ぎ…」

ラストは傷んだ黒のロープに、髑髏の仮面、手には暴食の鎌、そして肩にはカラスが一羽…つまり…死神だ

いやそのカラス何処で捕まえたんだ？

ラスト「この子は傲慢ですよ」
プライド

作者「……もうつつこむの疲れたよ、パトラッシュ…」

七つ夜「パトラッシュはいませんよ…いるのはネロだけです」

ラスト「変なコントはいいですからさっさと準備してください」

作者& a m p.; 七つ夜 「イエツサー」

*
*
*
*
*
*
*

ラスト「さて駆さん、この箱に手を入れて好きな紙を引いてください」

駆「分かつ「待ったー！ー！！！」ってなんだ！？」作者「そ、そんなバカな……！？」

七つ夜 「いっ
たいどうや
って…!？」

ラスト「……毎回良いところで邪魔してくれますね……主!!」

刹那「手前等……^{デメエ}！ 良くも『あんな場所』に閉じ込めてくれたなあ……！！
マ・ジ・で、殺す！」

「刹那……あんな場所ってどんな場所だ？」

刹那「・・・この状況で最初にその質問が来るとは思ってもみなかったぜ」

作者「駆っち以外に余ゆ……だから待て！流石にソレは洒落にならん
なぎやあああああああああああ……！！！！！！」

七つ夜「ガタガタガタガタガタガタガタ……」

ラスト「『フランベルジュ』ですか」

刹那「ああ、どうせ死なないなら苦しい方が良いだろ?・・・さて、

さつきの質問の答えだが、蟻がうようよという場所だった……うう」

ラスト「そんな場所に閉じ込めたんですか……七つ夜？」

七つ夜「い　いや／＼アレなら逃げ出せないかな／＼って思いました、待って！流石にソレはダメ……あああああああああ！！！」

ラスト「すみません主、まさかそんな恐ろしい場所に居たなんて…」
刹那「いやマジで怖かった…冗談抜きで死ぬかと思った」

＊ちなみに刹那は虫が嫌いです
ラストも

*
*
*
*
*
*
*

刹那「・・・で、つまり俺が閉じ込められてた間に駆に好き勝手やったと？ しかも一回マジで洒落にならない事までやったんだな？ よし：今から質問するぞ？ どれか好きなの選べ：

1, お前等も同じ目にあいたいのか？

2, 今からするのは遊び程度にするか？

リクス「奇遇ですね、私もです」

レイナ「さっきまでは性的なピンチでしたけど…今回は物理的にピンチですね」リキュル「あ、またギリギリで避けたわ！」

刹那「駆ー！ー！！もつとスピード上げるぞー！！！！」
 駆「ぎゃあああああああ！！！！」

刹那「ふう…楽しかった」 駆「はあ…はあ…し、死ぬか…と思…
った…」

ラスト「よく能力無しで逃げ切りましたね? あ、麦茶どうぞ」

刹那「さて、楽しかったしそろそろ帰って良いぞ？ じゃあな」

ラスト「そうですね。では七つ夜、今すぐ…出口へ連れていきなさい」

七つ夜「はい、分かりました」

THE
END

ラスト「なんて、そんな訳ないじゃないですか？」

駆「ラ、ラスト！？なんで此処に！？」

七つ夜「なんでも何もないですよ。まだ用件はすんでません」

駆「用件？なん…うっ！？（か、体が熱い？胸が、ア、アソコが…
いったい何が！？）」

ラスト「さっき飲ませた麦茶…実は遅刻性の媚薬、それもどんな清らかな聖女も堕ちるようなとびつきり強力な物です」

七つ夜「ああ、安心してください。此処には私たちしかいませんから、欲望に忠実になっても良いんですよ？」

駆「誰が、んあっ！？」

ラスト「胸を触っただけでこの反応ですか…クスッ」駆「ま、待って！ソコはあひい！！や、止めて…お願いだかあああっ！」

さて、じっくりと楽しませてもらいま——

『18歳になるまでは見ちゃダメですよ？』

ラスト「さて、じゃあ今度こそ本当にサヨナラです」七つ夜「先にアイテム（今まで撮った写真やブルーレイ、コスチューム、さっきの媚薬など）は送りましたよ」
ラスト「じゃあ駆さん、また会いましょうね？」

番外編2…説明1

夜つ七「どうも！作者こと夜つ七です！」

影の作者こと七つ夜です

夜つ七「今回の番外編は…なんとトンデモクロスオーバー！！！！」

トンデモはいりません！

夜つ七「すまんすまん…まあそれはともかく、今回は『ひぐらし』が舞台です。まあ…あくまで舞台であって惨劇がどうなるかはノリで決めるけどな」

ですから、主要人物とこの世界のルールを説明したいと思います

まずは主要人物から

主人公…桜井 怜^{レイ・ツァイベル}

原作はA r i s h i aさんの『神様の力で異世界へくちートってありですか?』

配役…前原 圭一

主人公2…南武 貴史

原作は秋代さんの『魔法先生ネギま!』三人の転生者

配役……無し。唯一配役の無い存在。まあ…強いて言うなら赤坂衛

ヒロイン1…ラスト

原作はこの小説…

配役…竜宮 レナ

ヒロイン2…如月 刹那

原作はラストと同じ

配役…園崎 魅音

ヒロイン3…ツカサ K ストレガー

原作は香多詩路さんの『フラグをたてたいっ!』

配役…北条 沙都子

ヒロイン4…柳川 駆

原作はししよ…退魔師見習いさんの『欠陥チート勇者』

配役…古手 梨花

ヒロイン5…小林 花梨

原作は秋代さんの『オリ主によるオリ主の我が儘』配役…園崎 詩音

ヒロイン(?) 6…アリス

原作は駆と同じ

配役…羽入

レギュラー1…グレゴリー・マウワイヤー

原作はツカサと同じ

配役…大石 蔵人

レギュラー2…御神 百合姫原作は香崎 真琴さんの『転生夫婦の
並行世界旅行』配役…入江 京介

レギュラー3…如月 優太

原作はAED EXさんの『黒き翼✦BLACK WING✦』

配役…富竹 ジロウ

レギュラー4…“盟主”アリス

原作はツカサと同じ

配役…鷹野 三四

まあ…主要メンバーはこんな感じですね

他にも出てきますから…楽しみにしてくださいね

夜つ七「よく考えたらかなり豪華な面子だよな？」

ま、貴方がダメだと全てダメですがね

夜つ七「……さ、さて、続いてこの世界のルールについて説明する
ZE☆」

上の未確認変態型ウイルス無自覚放出物は無視してください

あ、この世界のルールを説明しますね

1. チートをある程度抑える結界があります

2. イベントを終えるとチートを全開使用できます

例：貴史↓ひぐらしワールドに来る（強制イベント）

3. この小説のキャラはあくまで作者のキャラのイメージです

まあ：他にも細かいルールがありますが、気にしないで済むので大丈夫です
だいたいこんな感じです

「だいたいこんな感じ、ギャグマンガびよ、ギイイイ！！！」

いい加減にしましょうね
さて、ルールを理解しましたね？
キャストは誰か分かりましたか？

分かった人はひぐらしワールドにご招待です！

夜つ七「とりあえず頑張ってます…生暖かい目で見守っへえげっ！
」

あー、スッキリした

どうぞ、好きな席にお座りください
間も無く開演します。え？誰かって？

これはすみません。名乗るのを忘れてました
……結界を担当している馬鹿兄貴の弟、ロキです

まあ、私の事は気にしないでください
そろそろ…開演するみたいですよ？

話が気になるなら…
とりあえず期待をせずにボタンを押してください
ここからは…もはや何がなんだか分からないひぐらしワールドになりますので

それでは…なるべくお楽しみください
まあ無理でしょうが…

あと、誰か馬鹿兄貴を知りませんか？
仕事をサボって何処かに行ってしまった…苦情が殺到して…眠れな
いんですが…

番外編2..【暇潰し】

【貴史】

「暑い……蝉うるせー……だいたい、此処何処だよ？」

魔神を殺した後、マナの目から逃げるために世界の果てに来た…筈
なんだが

【貴史】

「どっからどう見ても日本、しかも昭和ぐらいだな」

何で俺はこんな場所にいるんだ？

【??】

「貴史…こんなところで何やってんだ？」

【貴史】

「ん？……気のせいかな？」

辺りを見回すが……誰もいない。暑すぎで幻聴が聞こえ……

【??】

「下だよ！」

……下か。あまりにベタ過ぎて気付かなかったぜ

下を見ると、女の子がいた

【貴史】

「えっと……何か用か？」

【??】

「どうしてこんな所にいるんだよ？」

【貴史】

「俺にも分からないんだよ…此処は何処か教えてくれないか？」

【??】

「此処は雛見沢だよ。まさかこんな所でお前に会うとは思わなかった」

雛見沢？……確か、『ひぐらしのなく頃に』に出てくる地名だった筈だが…

【貴史】

「まさか……世界の果てじゃなくて、別世界に来ちまったのか？」

【??.】

「おい？聞いてるか？」

【貴史】

「あ、いや……ちょっと考え事してたから聞いてなかった」

【??.】

「そうか……にしても、久し振りだな？」

……何言ってんだこの餓鬼？

【貴史】

「俺は子供の知り合いはいないぞ？」

【??.】

「え？……い、いや、確かに今はこんな姿だけど……ロリクエでも会っただろ！？」

んー、確かに似た奴を見たような気がするんだが……誰だか分からねえ

【??.】

「……もう良い!!!」

【貴史】

「えっ? いや、ちょっと待て! なんで怒るんだよ?」

【??】

「いや怒るんだろ! なんで……俺が分からないんだよ!?」

【貴史】

「ん……昔一回見た気がするんだよな……」

【??】

「……いい加減気付け! 駆だよ!?」

【貴史】

「駆? ……あぁなんだ駆かよ」

【駆】

「なんだって言うな!?」

【貴史】

「まあ……それは置いとけ。それより駆、とりあえず家に止めてくれ」

【駆】

「別にいいけど……人前だと口調変えるからな？誰かにこの口調を聞かれると色々面倒だし」

|| || || || || ||

【駆パパ】

「ん？駆子ちゃん……誰だそのお兄さんは？」

【駆】

「……僕の友達なのです」

【駆パパ】

「にしては年が離れて……まさか！駆子ちゃんの大切な人か！？」

は……？

今なんてったコイツ？

【駆パパ】

「ダメだ！私は認めない！パパは許しませ、ぐごげえ！？」

【駆ママ】

「お父さん……少しばかり黙りましょうか？」

【駆パパ】

「か、母さん？その間接はそっちには曲がないよ？ま、待って謝るか、アー！ー！！！」

バカテスのネタかよ…

つか、なんだこの家庭？

【駆ママ】

「……あ、すみません。私、駆子の母です。ちなみに名前はありません」

【駆パパ】

「か、駆子の父だ。名前は無い。駆子ちゃんに手を出し、冗談です睨まないでください！！！」

……なんだこの夫婦漫才？ツツコミか？ツツコミ待ちなのか？

【駆】

「お義父さんもお義母さんも少し落ち着くのです……貴史が家に泊まって良いですか？」

【駆パパ】

「却下だ！」

【駆ママ】

「別に良いですよ？」

【駆パパ】

「母さん！？な、何を言ってる！黙りますか？それとも……♪」黙らせていただきます、痛い痛い痛い……！頭を踏むのは止め『ゴキュリ』ギャアアアアアアアア……！！！」

【駆ママ】

「貴史さん、別に良いですよ？……布団は駆子と一緒に良いですよ？あ、大丈夫です。ちゃんと防音の部屋にしな」お義母さん、ふざけたらダメなのです♪」……も、もう、少しふざけただけですよ？」

……変な家族だな

【駆】

「貴史……いらっしゃいなのです。ちゃんと別々の布団だから安心するのですよ」

【貴史】

「当たり前だ！……ん？なんか、あそこの畳に血が付いてるぞ？」

いや、徐々に増えてるような？

【駆】

「気にしたら負けなのです……僕はもう気にしません」

いや、せめてなんなのか教えてくれ

【駆】

「とりあえず今日はもう休んだ方が良いでしょう？」

|| || || || || ||

【駆】

「貴史……何をやったんですか？」

【貴史】

「ああ……ただ料理してるだけだ。……料理をしてるはずなんだ」

そう、俺は料理をしてたはずなんだ……なのに、何故か厨房は半壊し、包丁は真っ二つになり、鍋は爆発した

【駆】

「貴史……頼みますからもう二度と料理はしないで欲しいのです」

【貴史】

「は、はい…」

やっぱりカスミや薫が言うように料理はしない方が良いみたいだ…

【駆パパ】

「駆子ちゃん！パパと一緒に風呂に入らないかい？」

【駆】

「お義父さんはいやらしい手つきで触るから嫌なのです。ニパ☆」

【駆パパ】

「ごふっ……！！！」

あの父親……変態なんだなあ……駆を見る目がかなりヤバイからすぐに分かったが

【駆ママ】

「お父さん♪少し……頭冷やしましょうか？」

|| || || || || ||

シャリシャリ…シャリシャリシャリ…

ペロペロ…ペロペロペロ…

【貴史】

「……………で、お前は何でいるんだよ？」

【駆】

「……………作者が無理矢理送ったんだ。作者権限なんて大嫌いだ…」

【貴史】

「ご馳走様……………で、何の話してたんだっけ？」

【駆】

「いや聞いたなら聞けよ！？まあそれより…この世界可笑しくないか？」

【貴史】

「まあ…確かに俺が知ってる『ひぐらし』とは全く違うな」

この世界は色々とおかしい……古手神社、じゃなかった柳川神社に『お賽銭 ちょうだいよ お賽銭』って書いてあるのには驚いた……いや確かに神社だけださ？

【駆】

「それ以外にもD r. イリー（入江）診療所じゃなくて……『D r. 百合姫診療所』になってるんだよな……」

【貴史】

「……やっぱりあの人だよな？」

【駆】

「あの人しかないよな……」

【貴史】

「マジで凄い事になってるよな……この世界」

もしこの世界を作った奴がいるなら絶対に馬鹿だ

【駆】

「そう言えば……貴史はどうやって来たんだ？」

【貴史】

「『3人の転生者』を読め」

【駆】

「出来るか!？」

【貴史】

「なら、かくかくしかじかだ」

【駆】

「そんな事があったのか…」

【貴史】

「じゃあ次はお前の番だな」

【駆】

「良く分からないんだけど……作者が暇だったから送ったらしい。
しかも……古手梨花の立ち位置で!しかもご丁寧に古手神社を柳川
神社にまでしてな!」

つまり……巫女服着させられ、皆の前で恥ずかしい目にあい、あげ
くの果てに生きたまま腹を裂かれるんだな……

【駆】

「しかも……キャスト見せてもらったけど、何あの布陣……絶対なぶり殺されるよ」

【貴史】

「どんな奴等がいるんだ？」

【駆】

「最近出番の無い歩く無法地帯、それに惚れてるドS、チート夫婦……とかだな」

【貴史】

「………どんな場所に行っても悲惨な目にあうのはお前と優ただな」

【駆】

「うるさい！俺だってこんな目にあいたい訳じゃない！！！」

【貴史】

「まあ落ち着け……それより、アリスは置いてきたのか？」

【駆】

「………やっぱり見えてないみたいだな。貴史……さっきから隣にいるぞ？」

【貴史】

「………何処にもいないんだが？………ん？」

何も無い場所から……ポタポタと血が出ている…

【貴史】

「なあ……駆、アリスの立ち位置って……羽入か？」

【駆】

「……………ああ」

【アリス】

『この体のおかげでいつでも駆様に抱き着けるのです!!』

【駆】

「抱き着く以上の事までしてるだろうが!!?」

【貴史】

「……それはそうとアリス、何で鼻血出してるんだ?」

【アリス】

『駆子ちゃんの幼児姿が可愛らしくて…ハア…ハア…ツルペタ♪…
…もう我慢出来ないのです!いただきます♪』

【駆】

「なあ！？ま、待て！？少し落ち着…ひゃう！？」

【アリス】

『駆様…今日は外でやりましょうね♪…大丈夫です。誰にもバレません！』

バレないのはアリスだけだと思うな……つか、もし誰かに今の駆が見つかったらどうなるんだ？

【駆】

「あひい！？つ、摘まむなあ！！ンッ！…あ、ん！」

【貴史】

「まあ良いや。アリス頑張れよ」

【アリス】

『もちろんです！駆様……今日はたっぷり楽しみましょうね♪』

※放送禁止です

|| || || || || || || ||

【貴史】

「暇だな……」

はあ…何か楽しい事があれば良いのに…赤坂とかが事故で病院運ばれたら良いのに

【貴史】

「まあ……あり得ない話だけだ『ガガガガ…ドガアッ！！！』…
…ん？」

『大変だー！ー！！！！観光客が轢かれたぞ！！！！』

『この近くに医者……ダメだ！あの医者しかない！！！！』

『しょうがねえ……このまま隣の町の病院まで送ってくる！！！！』

僅か…30秒の出来事だった

【貴史】

「もしかして……今の赤坂か？」

|| || || || || || ||

翌日の朝刊…

【観光客は公安だった!!】

昨日の夕方、謎のトラックに轢かれ、両足の骨が粉碎骨折した観光客（推定30歳前半）は雛見沢を調べに来た公安の人間らしい（以下略）

【貴史】

「……マジで赤坂だった」

コレ……俺のせいじゃ無いよな？

【貴史】

「まあ……考えるだけ無駄だな。駆はどう思う？」

【駆】

「……」

返事がない……ただの屍のようだ

【駆】

「死んでない…まだ死んでないから」

【貴史】

「いきなり何言ってるんだ？」

【駆】

「いや……何故かツツコミを入れなきゃいけない気がして……じゃなくて！あっさりと見捨てるな！？大変なんだぞ！？主に精神と周りの視線が……！」

【貴史】

「気持ち良かったか？」

【駆】

「え？まあ…良かった…けど」

【貴史】

「なら良いだろ」

【駆】

「いや良くないから……！」

うるさいな……あんなに楽しんでたんだから良いだろ別に……

【貴史】

「それより駆、コレ読んでみる」

【駆】

「うわっ！？いきなり新聞を投げるな！破れるかもしれないだろ！
で何を書いて……え？あ、赤坂さん！？う、嘘だろ？あの人一昨日
遊びに来たばかりだぞ！？」

俺より先に来てたのか

じゃあ……今はだいたい二日目あたりだな

【貴史】

「駆……警察手帳作ってくれないか？」

【駆】

「……何で？」

【貴史】

「楽しそうだから俺が赤坂の役をやる事にする……まあ、簡単に言
って暇潰しだな」

【駆】

「……巻き込まれないなら良いや」

|| || || || || ||

【貴史】

「よし…クラウドに会いに行くか」

【駆】

「待て。まずは俺を離せ！」

何言ってるんだよ……そんなの

【貴史】

「却下に決まってるだろ？お前だけ仲間外れにはしないよ」

【駆】

「いやむしろ無理矢理手伝わせようとするな！？」

【貴史】

「さて、クラウドは……多分アッチだ」

【駆】

「は～な～せ～！！！」

|| || || || || ||

【貴史】

「おかしいな…クラウドがいない」

【駆】

「当たり前だろ…クラウドも他の奴がやってるんだから」

……おい

【貴史】

「駆……誰がやってるのか教えろ」

【駆】

「グレゴリーさん」

聞いた事もない名前だな…そんな奴知り合いにいたっけ？

【駆】

「貴史は……会った事ないのか？」

【貴史】

「多分な…」

グレゴリー…やっぱり思い出せない

【駆】

「なら教えてやるからいい加減摘まみ上げるのは止めろ」

【貴史】

「いいけどさ…お前小さくなったんだからその分歩くの速くしろよ？」

【駆】

「少しはお前が合わせろよ!？」

もちろん貴史は歩く速度を変えなかった…

|| || || || || ||

かれこれ10分（それでも車より速い）は歩いた先にあるのは…小さな雀荘………何で雀荘？

【馭】

「多分……ここで四苦八苦してると思う」

理解不能だ

何で警察が真っ昼間から雀荘にいるんだ？仕事か？遊ぶのが仕事なのか？

クソッ……なんて良い仕事なんだ

【馭】

「……貴史、殺気漏れてる」

馭のそんなセリフを聞きながら雀荘へ入った

||
||
||
||
||
||

【さとさん】

「ロン！大三元だ！！！」

【グレゴリー】

「また役満だと！？」

ボロ負けだ

拍手したくなるような歴史的なボロ負けだ

25000点スタートとして、最終点数が－48000点は凄いな

【おやっさん】

「まあ…コレでまたブルーマーメイドの代金が入ったな」

【さとさん】

「グレゴリーさん、すまないねえ♪」

つまり…鴨にされてるって事か

【駆】

「貴史、話さないのか？」

【貴史】

「いや見てるのも楽しいしな……ん？」

今、アイツ積込やがった……ああ、だからあんなに勝てるのか。素人相手に酷いな

まあ……グレゴリーとかいう爺さんが負けるのは別にどうでも良い

……だけど

【貴史】

「イカサマしてる奴は叩き潰したくなるんだよな。おい、そこの爺さん達、俺も一緒にやらせろ」

【さとさん】

「ん？なんだ坊主、お前もやるのか？」

【おやっさん】

「……良いだろう。だが負けたら、分かってるな？」

【貴史】

「はいはい……どけ爺さん」

グレゴリーを退かし、3人で始める……危なくなっ
てグレゴリーを飛ばす……とかふざけた真似をさせないためだ

【貴史】

「じゃあ……お前から親だな？」

【さとさん】

「手加減はしないからな？」

まあ……腹減ったし、さっさと終わらすか

|| || || || || ||

【さとさん】

「リーチだ！」

…まあ流石にこんなリーチじゃあ、おやっさんは引っ掛からないだろうが…坊主は出してくれるかもな

【おやっさん】

「どうせこの辺だろ？」

ちっ！やっぱりな…俺の安全牌でダメ聴張ったな？

【貴史】

「……………」

どうやらこの坊主も、人のリーチの現物や筋を切るくらいの腕はあるみたいだな…まあ、それが命取りだがなあ！

【おやっさん】

「…どうした坊主？さくって切らねえか」

【貴史】

「ダメ聴張ったアンタに言われてもな……コレなら通るな？」

なっ！？おやっさんのダメ聴に気付いた！？

【さとさん】

「やるじゃねえか坊主！…ちっ！」

一発は出来なかったな……おやっさんはもちろん安心出来ないが、
案外一番の強敵はこの坊主なのかもな

その後、のらりくらりとかわされ、流局を迎えた

【さとさん】

「テンパイ」

【おやっさん】

「テンパイ」

【貴史】

「テンパイ」

坊主もテンパイ？って！？

【さとさん】

「俺とおやっさんの当たり牌持ってやがったのか！？」

【おやっさん】

「しかも空聴だど？！」

【貴史】

「……良いからさっさとやれよ。コッチはさっさと終わらせたいんだよ」

|| || || || || ||

【さとさん】

「ちっ……」

いい牌がこねえ……！おやっさんはどうだ！？

【おやっさん】

「リーチだ!」

おやっさんはリーチしたか。なら、おやっさんに任せるとS「ロン!」…へ?

【貴史】

「七対子だ…で、次の親は俺だよな?」

ぼ、坊主…なんか殺気を感じるんだが?

|| || || || || ||

【貴史】

「どうした? ソーズは切らないのか?」

くっ…どう見ても坊主の当たり牌だろうが!?

【おやっさん】

「カンだ!…!! リンシャンツモ!…!!」

おやっさんナイス!…!!

【貴史】

「おい、カンって言った瞬間、ロンって言ったのが聞こえなかったか？ チャンカンだ」

【おやっさん】

「チャ、チャンカンだと?!」

【さとさん】

「おいおい…狙って出来る物じゃないぞ?」

【貴史】

「だからなんだ？ 良いから点棒出せ…」

|| || || || || || ||

クソ：坊主が親になってからまったく上がれねえ
このままだと…負ける

そんな事を考えていると……机の下からサインを送ってきた

【おやっさん】

(叩き潰す)

……そうだ。まともにやる必要なんてない

【さとさん】

(了解…オープンします)

【貴史】

「次はアンタの番だぞ？」

【さとさん】

「あ？ああ、そうだったな……リーチだ……！！オープンで行くから覚悟しやがれ！ピンズの一四七待ちだ！」

はいここで分からない人の為に説明！

※オープンリーチとは…

自分の待っている牌を相手に知らせる事…かなり不利になるけど、それで上がると役満(子供だから32000)と同じだけ点数がもらえるんだよ！

まあ…ローカルルールらしいし、この知識も人から聞いた奴だから本当かどうか分かんないけどね！

以上で説明終了！

【おやっさん】

「まあ…今の訳の分からない説明はともかく、次はお前の番だぞ？」

坊主のは…：…ピンズの一！河（捨て牌）を見る限り坊主の当たり牌じゃあねえはずだ！ピンズの二三も捨ててあるからな…

【貴史】

「……………」

【さとさん】

「どうした？早く切らねえか」

その時、坊主の顔が恐ろしいくらい綺麗な笑顔を浮かべた

【貴史】

「俺の勝ちだ。ツモ…国土無双」

【おやっさん& a m p; さとさん】 「……………は？」

完全に場が凍り付いた…

『国土無双』は役満の一つ……しかも貴史は親

周りから奪う合計点数は……48000点

【貴史】

「さて、グレゴリー……だよな？ 飯奢れ」

|| || || || || ||

【グレゴリー】

「は？ い、いや、何で俺が飯を奢らなきゃいけな、……お前、何で俺の名前を知っている？」

あ、……まだ言っていなかったな

【貴史】

「赤坂の代わりに来た南部貴史だ。よろしくな」

【グレゴリー】

「赤坂の代わりだ？……そうか。俺はグレゴリー＝マウワイヤー……刑事だ」

なりきってるな……

まあクラウドより話し方が固いけど、コレは気にしたら負けだな（誰にかは聞くな）

【貴史】

「まあ挨拶は終わったから聞くが、警官が真っ昼間から麻雀やって良いのか？」

【グレゴリー】

「違う！麻雀はやりたくてやってるんじゃないやねえ！」

なら何でやってるんだ？

今は麻雀してる場合じゃないだろ？

【グレゴリー】

「あの男から誘拐事件の情報を買おうとしてただけだ！……！」

【貴史】

「つまり、情報を出汁に金を搾り取られたと……」

……馬鹿だ

【駆】

「それより何の情報が欲しかったのですか？」

駆……お前も人前だと梨花になりきるのか？

【グレゴリー】

「赤坂を轢いた車の持ち主と……赤坂が追っていた誘拐事件の件だ」

【貴史】

「本当にコレが知ってるのか？」

【さとさん】

「コレ扱いかよ……まあ、確かに知ってるが……まだ麻雀で負けてないからな。渡す訳にはいかねえな……」

【貴史】

「積込やキャタピラを素人相手にやってた癖に偉そうに言うな。あ……積込とかキャタピラってのはイカサマの名前だ」

シンとする

正確には爺2人が凍結、駆とグレゴリーが呆気にとられている

そして…

【グレゴリー】

「テムエ等……覚悟は充分だよな？」

リンチが行われた…
　　ただ金を取られたんだ？

|| || || || || ||

【グレゴリー】

「さて…情報を貰おうか？」

【さとさん】

「あいゝ…分がしまじだ。ど、どうゝぞ」

爺（さとさんだっけ？）が何かメモを渡してきた…

貴史達は情報手にいれた！

【さとさん】

「ぞ、ぞれの37ページに書いてありま…（かく）」

37ページか…あった

【貴史】

「…………ふん」

【駆】

「なんて書いてあるのですか？」

【グレゴリー】

「……………」

【貴史】

「字が汚くて読めない」

【駆&Gregory】

「っておい!？」

息ピッタリだな…

【貴史】

「まあ今のは冗談だ…メモにはこう書いてある」

観光客の轢き逃げについて

- ・ 最初から彼を雛見沢から追い出すのが目的だった
- ・ 轢き逃げした車のナンバーは存在しない番号である・運転手は警察で喉を掻きむしり自殺?

犬飼大臣の孫の誘拐について

- ・発生前後、家の周りに怪しい輩はいなかった
- ・大臣に電話した物は自分の事を“盟主”と言ったらしい
- ・孫の荷物は全て大臣宅に戻ったが、財布だけが見付かっていない

【グレゴリー】

「……………盟主だと？」

【駆】

「どうかしたのですか？」

【グレゴリー】

「い、いや……単なる偶然だろう。それよりも……やはり赤坂の件は意図的だったのか……」

それよりも気になるところがあるだろうが……

【駆】

「それよりも、喉を掻きむしって死んだ人の方がビックリなのですよ」

【グレゴリー】

「まあ、な。だがコレは昨日担当の奴から聞いてたからな……」

【貴史】

「それより……手掛かりになる情報あったか？」

【グレゴリー】

「ああ……赤坂を追い出そうとしたって事は、赤坂がいると困るって事だ。つまり、誘拐云々はともかく……公安の人間が雛見沢に居られちゃいけない何かがある筈だ。そして現段階で一番可能性が高いのは誘拐事件だ……流石に無関係だとは思えねえ」

確かに……つか、雛見沢が舞台なのに雛見沢以外で起こってたら洒落にならねえ

【駆】

「案外……警察で新しい手掛かりが見付かってるかもしれないのですよ」

それは原作の関係か？

【駆】

「……ニパ☆」

【グレゴリー】

「……？よく分からねえが、明日また会うとするか。色々な手続き

もしなきゃいけないしな」

|| || || || || ||

【貴史】

「……もう朝か。駆、朝飯くれ」

……ん？いつもならすぐに呆れたような声が聞こえる筈なんだが

【貴史】

「駆？……いないのか？」

【駆パパ】

「駆子ちゃんなら買い出しに行ったぞ。ははは！フラれたな！やーいやーい！」

【駆ママ】

「ふふふ……少し地下牢に入ってもらいますね？」

【駆パパ】

「か、母さん?! 地下牢って何!?!」

駆の義母の上からスルスルと縄が降りてきて…

【駆ママ】

「まあ…軽く2日程自分の無能さを呪ってください♪」

縄を引くと……畳が開き、下に変態が落ちた

【駆パパ】

「おゝたゝすゝけゝ！！！」

ドグシャ！！！！

多分日常的にやってるんだろうな……

【駆ママ】

「貴史さん、玄関にお客様がいるんですが？」

【貴史】

「グレゴリーか？……よし行くか」

玄関に行くとグレゴリーがいた……何故か焦っているように見える

【グレゴリー】

「貴史！今すぐ警察署に行くぞ！！！」

【貴史】

「なんでだよ？」

【グレゴリー】

「良いから来い！大変な事になりやがった！」

|| || || || || ||

警察署でグレゴリーが見せたのは……財布？

財布には【T o s h i k i . I】と書かれている

【貴史】

「あ、手掛かりか。良かったな。コレはどこで見付けたんだ？」

【グレゴリー】

「確かに…手掛かりだ。だがな！コレは最悪の結果なんだよ！！！」

グレゴリーの言う言葉の意味が分からない。何でコイツが最悪の結果なんだ？

【グレゴリー】

「財布の中にある……写真を見てみる！」

確かに財布の札入れには一枚の写真が入っているな

【貴史】

「何が写って……！？」

写真には……縛られた駆が写っていた

【グレゴリー】

「まだ……大丈夫らしいが、もしコレ以上介入したら……殺すそう
だ」

【貴史】

「……………この財布、どこで拾った？」

【グレゴリー】

「高津戸の辺りだ……雛見沢を更に上流に上がった場所だが高津戸
だ」

【貴史】

「そこまで案内しろ……」

【グレゴリー】

「……この子はどうなる！？手前は…見捨てるつもりか！？」

【貴史】

「駆は絶対に大丈夫だ！アイツが簡単に死ぬかよ！自力で脱出出来る筈だ！」

【グレゴリー】

「そうか……俺はこの子を助けに行く。地図を書いてやるから自分で行きな」

|| || || || || ||

……う

な、んだ……何が起きた？

買い出しに行ったら…いきなり後ろから襲われて……眠くなって……

【??】

「ご苦労様。欠陥品とはいえチート主人公だから少し大変かと思っただけど、案外楽だったかしら？」

【??】

「ふふっ…そう言うな。この世界にはチートを封印する結界が張ってあるのを忘れたか？まあ…私達や一部の例外を除いて全員封印されてしまうんだ。彼、いや彼女が弱い訳ではない」

【??】

「忘れてないわ。だけど、これじゃつまらないじゃない？」

誰だ？いったい何の話をしている？

くそっ…耳に何かつまってるのか！？よく聞こえない！

【??】

「退屈か？」

【??】

「当たり前よ……ツカサもないし」

【??】

「クッ！確かにそれは退屈だな。まあ……安心しろ。そろそろ彼等も動くだろう」

【??】

「そうかしら？グレゴリーがまだ決断出来てないかもしれないわ」

【??】

「いや……おそらく意見が対立するだろう。グレゴリー殿は駆子君を助けに来るだろうが……貴史殿は結界がある事を知らないからな。自力で脱出するとも言い、犬飼少年を助けに来るだろう」

【??】

「あら？それはなかなか楽しいシチュエーションね」

……この声、どこかで！

確かツカサの知り合いに居た筈だ！

【??】

「だろう？どうだ？私達も別行動を取ってみないか？」

【??】

「内容によるわ」

【??】

「なに、私は貴史殿に会いに行く…そして君は」

【??】

「私はグレゴリーに会いに行くのね？……良いわ。久しぶりにグレゴリーにも会いたいし」

【? ?】

「まあ楽しめ盟主殿。こんな機会はまずないぞ?」

【“盟主” アリス】

「そうね…楽しませてもらうわ」

【? ?】

「ではまた後で……あ、すまないが送ってくれないか? 貴史殿なら
そろそろ着くだろう」

【“盟主” アリス】

「しょうがないわね」

【? ?】

「かたじけないな」

|| || || || || ||

長い距離をひたすら歩き…高津戸についた

【貴史】

「…………あの小屋、人の気配がするな。…………いきなり増えた？」

…………まあ良い。とにかく今は助けるのが最優先だ

貴史は小屋に近付き、扉を開けた

中には縛られてグッタリとしているガキと、見覚えのある女がいた

【??】

「ふむ…………歓迎しよう。貴史殿、こんな場所に何か様か？」

【貴史】

「一度しか言わねえからな…………魔理亜、餓鬼を返せ」

【魔理亜】

「断る…………私は目的があって誘拐したんだ。そのくらい分かるだろう？」

確かにな…………

だとしたら…………やっぱり戦うしかないか

【魔理亜】

「うむ…………本気で殴って（愛して）くれると嬉しい」

【貴史】

「……変態」

【魔理亜】

「そんなに褒めるな」

誰も褒めてねえ！

むしろ貶してるだろうが！

【魔理亜】

「それはそうと、早くやり合おう。君のその逞しい物で私の体を貫き、本能のままに蹂躪するといい」

【貴史】

「その読者に誤解を与えるような言い方を止めろ」

とにかく……やるか

|| || || || || ||

くそっ……

助けに来たのは良いが…

小屋の入り口にはガタイの良い奴等が2人が見張っている……

……死角らしい死角が無い。窓は無い。裏口も無し。その上、唯一の入り口は見張りがいやがる
あるとしたら……上ぐらいだ

【グレゴリー】

「ちっ……あまり使いたくないんだが……しょうがねえな」

懐から出したのは……銀色の筒……手榴弾だ
それを2つ取り出し……安全装置を抜き……投げた

見張りの奴等はそれを見て即座に伏せる

【グレゴリー】

「よく訓練されてるな！」

奴等が伏せると同時にグレゴリーは駆け出し、一人には伏せて下がった頭を蹴り上げ、もう一人には背中から肝臓の辺りに本気の拳を叩きつけた

両者ともピクリとも動かなくなり、グレゴリーは2人が持っていた武器を取り上げた

どれだけ訓練をした相手だとしても、不意を突く事が出来れば……倒す事が可能だ

【グレゴリー】

「ふう…信管を抜いてあるとはいえ、流石に本物は胆が冷えるな。
……今助けてやるからな」

扉を開け、中の様子を見ると……誰もいない？

駆、いや駆子はいりようだな…

だが……入り口の前にいた2人を除き、見張りはいないだと？

【グレゴリー】

「あの女なら……こんな緩い事はしない。罠か？」

いや……今はそんな事を考える必要は無い。助けるのがまず先だ！

【グレゴリー】

「助けに来たぞ！」

【駆】

「グ、グレゴリーさん？何で！子供はどうするんだよ！？」

ん？……口調が違うような気がするんだが？

まあ……今はそんな事は関係無いな

【グレゴリー】

「子供は貴史が助けに行ったから大丈夫だ」

【??.】

「それは分からないわよ？アッチには……あの女がいるから」

【グレゴリー】

「……ッ!!?」

【“盟主”アリス】

「久しいわねグレゴリー。元気そうで何よりね」

【グレゴリー】

「盟主って聞いた時はまさかと思ったが……やっぱりアンタだったのか」

くそっ……最悪の予想が最悪のタイミングで当たっりやがった
勝てる気はしないが……やるしかねえか！

【“盟主”アリス】

「待ちなさい。私は貴方と戦うつもりはないわ。……ツカサに怒られたくないもの」

……ツカサ？

誰だ？……いや、俺はその名前を知っている？

【“盟主”アリス】

「どうしたのグレゴリー？……もしかしてツカサの事が分からないの？」

いや分かる！大切な名前なのは分かる！

なのに…分からない！誰なんだ！？

痛い……頭が割れる……！！！！

【グレゴリー】

「があああああああ……！！」

【“盟主”アリス】

「グレゴリー！？待ちなさい！まだ制御出来ない聖痕ステイグマで何をするつもり？！」

何故だ？急に息子に会いたくなつた……ツカサ？

違う……息子の名前はフレイスだ

なんだ？俺は何を……誰を忘れてやがる？！

【“盟主”アリス】

「ツカサ……ごめんなさい」

誰なんだ？

お前は……いったい誰なんだ？

会えば思い出せるのか？

ならすぐに会いに……！

耳元で鈍い音が聞こえた

何か硬い物で殴られたようだ……

急に寒気がした……今日は猛暑の筈なんだが？

だんだん意識が朦朧としてきた

意識が途切れる瞬間……

この世界に來た時に会った女の言葉を思い出した

『この世界には色々な奴が来る。まあ……中には死神や天使までいるんだがな。それだけだとつまらないだろう？』

『だからな……私は誰か一人に呪いを掛ける事にしたんだ。誰でも良かったんでな。一番最初に來たお前に掛ける事にした』

『お前に掛ける呪いは大切な者を思い出す事が出来なくなる物だ……まあ、それがどれだけ恐ろしい呪いか分からんだろうがな』

|| || || || || || ||

【駆】

「グレゴリーさん？グレゴリーさん？！」

【“盟主”アリス】

「大丈夫よ……気絶させたただけだから」

それよりも……先程グレゴリーが急におかしくなった事の方が気になるわ

ツカサの名前を聞いただけで……あそこまで豹変するなんて

【“盟主”アリス】

「とにかく……ここでの記憶を消してから診療所まで運びましょう……何をしてるの！手伝いなさい！」

【駆】

「あ、はい！」

|| || || || || || ||

【貴史】

「蛇咬!!!!」

魔理亜の右肩を掴み、そのまま喰い千切った……が

【魔理亜】

「はああ、ん♪もっと、もっと激しいのをくれえ」

まったく効いてねえどころか、威力を上げれば上げる程悦ぶとかふざけんな——!!!!

【魔理亜】

「どうした？私を倒すのでは無いのか？」

【貴史】

「攻撃する度に悦ぶ奴とマトモに戦う訳無いだろ!？」

コイツの能力異常だろ!? 蛇咬はまだ分かる!

だけど……【終末魔法 黙示録大霊剣 絶対終末】と【真・蛇殺ー

極】まで使ったのに笑いながら復活するんじゃないやねえ——!!!!

【貴史】

「くそっ……こうなったら!」

貴史は魔理亜を睨み付ける……嬉しそうに頬を赤くする魔理亜

2人の視線が交わった瞬間、貴史は魔理亜に殴り掛かった！

僅か数秒で全身をズタズタにされる魔理亜……だが、顔は上気し、殴られる度に喘ぎ声をあげる

【魔理亜】

「もっと、もっとだ！ ひいいい♪があ……ぐきい……はああ、あん♪」

貴史の手が不意に止まり、魔理亜から距離を取る

【魔理亜】

「い、今のを……もう一度頼む♪」

【貴史】

「…………ジャスト一分だ」

【魔理亜】

「え？」

魔理亜が見ていた世界が砕け散ると、目の前に自分を見下ろす貴史がいた

【魔理亜】

「邪眼かな？」

【貴史】

「ああ……お前が夢を見ている間に穴を掘ってお前を埋めた。まあ頭まで埋めても死なないだろうが……今回はガキの方が優先なんだな」

そう言うとき貴史は縛られていた子供を持ち上げ、走り出した

【魔理亜】

「放置プレイか……コレも悪くはない」

|| || || || || ||

【百合姫】

「あら？アリスに駆子じゃない？その人は急患かしら？」

【駆】

「頼む！助けてくれ！」

【“盟主”アリス】

「傷は私が治したわ……けれど、グレゴリーの呪いが解けないの」

【百合姫】

「だから私の所に来たのね……」

ユリが力を使い、グレゴリーを調べた

ユリの力は『干渉する程度の能力』…万物に干渉する事が出来る能力だ

数秒経ち、ユリは言った

【百合姫】

「無理ね。普段の私なら簡単だけど……今の私じゃこの呪いをどうにかするなんて無理よ」

【“盟主”アリス】

「自重しないのが貴女の売りでしょう？なら結界ぐらい無視しなさい！」

【百合姫】

「したいんだけど……この結界、私達より強い奴が張ってるから無理」

【“盟主”アリス】

「貴女より強い？……嫌な予感しかないわ」

【駆】

「確かに嫌な予感しかないな」

【百合姫】

「でも……そんなにヤバいんなら、コレに関する記憶を封印したらどうかしら？」

【“盟主”アリス】

「……………そうね。自我を失って狂うより……ずっと良いわ」

||
||
||
||
||
||

【グレゴリー】

「すまない。犯人には逃げられた」

【貴史】

「気にすんな。俺もわざと逃がしたし」

正確には今頃抜け出して来ただろうな…

【駆】

「……………」

【貴史】

「で、どうかしたのか駆？さっきからお前、ジメジメしてカビ臭くてキノコが生えてるからな？」

【駆】

「セガ・サターンの『ぷよぷよ』やってない人に分からないネタを振るな！」

いやそれを知ってるお前に驚いたよ…

【貴史】

「まあ…それはそうと、事件は無事解決…グレゴリーが昇進したら面白いな」

【グレゴリー】

「いや…どちらかと言うと昇進はお前だろう？俺は何もしてないかな」

【貴史】

「俺が昇進するかよ。だって俺警察じゃないし」

【グレゴリー】

「……………は？」

【貴史】

「いや…だから俺は警察じゃないんだよ。暇だから手伝っただけ」

あまりの言葉に理解出来ないグレゴリー…

【グレゴリー】

「じゃ、じゃあ…最初から嘘だったのか！？」

【貴史】

「ああ…まあ気にすんな。ガキを助けれた…それでいいだろ」

【グレゴリー】

「……………そうだな」

2人で笑いながら酒を飲んだりした……コイツの料理は美味かった

【貴史】

「じゃあなグレゴリー。また会えたら会おうぜ」

【グレゴリー】

「ああ……次会う時を楽しみにしてるからな」

|| || || || || ||

【貴史】

「さて……まあ2日間だったけど案外楽しめたな」

まあ……美味しい物も食えたし、土産も買ったし……何より美味しい酒が飲めたしな

【駆】

「貴史……」

【貴史】

「なんだ？」

【駆】

「出来れば……次来る時は呪いを解く事の出来る物を持ってきてくれ」

【貴史】

「……………分かった」

俺は蛇咬で空間に孔を開けた

【貴史】

「じゃあな……」

貴史は孔に向かいゆっくりと歩き、完全に入ったと同時に孔は消えた

※※※※※

お疲れ様会（暇潰し）

刹那「出るキャラ数少なっ!？」

ラスト「それ以前に地の文がほとんどありませんですね」

貴史「はぁ……なんかスゲー肩凝った」

駆「俺も……アリスに襲われるし、人質にされるし……良いところ無かった」

刹那「そう言うな……グレゴリーさんに比べればまだましだろう？」

ラスト「文句は作者が受け付けてますよ？」

刹那「まあ……それはそうと、今回の【暇潰し】は何がやりたかったんだ？」

夜つ七「だからそのまんま暇潰しだけど？」

一同「は？」

夜つ七「だから、貴史の立ち位置を無くしたのも、グレゴリーに呪

いが掛けられたのも駆がアリスに襲われたのも、全部が全部暇潰し編後のふくせ……あの？何で怒ってるんですか？」

刹那「……（ぶちい）当たり前だー！ー！！！」

夜つ七「ちょ、その動き！？絶対人間止めて、待てそのデカイのは洒落にならな、ぎゃああああああああ！！！！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3125s/>

俺の異世界物語:一部の番外編置場

2011年4月8日07時34分発行